

NPO 法人

# 小金井雑学大学

第 22 号 平成 27 年 1 月

だより

## 生涯学習の重要性

小金井雑学大学 代表理事 五十嵐京子



代表理事 五十嵐 京子

平均寿命が 80 才を超え、世の中では定年も 60 才から 65 才へと移行しつつあります。しかし、実際に 60 才を超えた場合の仕事はそれ以前より責任も軽く、時間も少なく、賃金も安いという条件になってきます。相変わらずリタイヤ後の過ごし方は大きな課題に違いありません。

また、今学校教育の方も見直しが話し合われています。今の

6・3・3・4 制がスタートした戦後の時と比較して、子どもたちの体力は 2 歳ほど上回っているのだそうです。小学校入学以前の幼児教育をどうするか、また小学校 6 年、中学校 3 年という括りについても柔軟に対応できるようにしようとしています。既に、三鷹市では 8 年前から小中一貫教育の取り組みが行われ、特に小学校から中学校に移行するときの様々な問題が解消されているという報告があります。

いろんな場面で制度のひずみが出てきているのかもしれませんが。今私たちが考えなければならぬ当面の課題は、定年後の過ごし方であり、生涯学習の問題です。小金井雑学大学を

運営していて、仕事とは別に新たなテーマに取り組んで、著書を出版したり、講義ができるほどのレベルにしている方々との出会った時には本当にすばらしいと思います。少しお話を伺うと、定年を待って取り組むというより、50 代くらいから興味を持って取り組んでいる方が多いように思います。会社によつては定年が近づくと閑職のような部署に異動になることもあるようですし、時間的なゆとりが出てくるのかもしれませんが。その時が次の自分のテーマに取り組むチャンスかもしれないですね。

一方、技術の変化は著しく、コンピューターの世界に代表されるように、日進月歩。これを道具と考えると、道具の使い方は常に勉強する姿勢がないとついていけないのが実態です。

ここに生涯学習が如何に重

要かを感じずにはいられませ  
ん。50代から60代を、第二の  
仕事にスタートする時期と見  
ての学びの仕組みがもつと世  
の中にあっても良いかもしれ  
ません。そして、その学びは次  
の仕事の糧となり、その仕事に  
よって収入を得、少子高齢社会  
を乗り越える必要があります。  
楽しみながら一定の収入にな  
るような仕組みをどうしたら  
作れるか、真剣に考えるべき課  
題だろうと思います。



# 十二支と羊(未)年

松蔭大学教授 文学博士 石上 七鞆



第366回講義 2月16日

頂きます。

中国では殷の時代、紀元前11世紀に暦の組み合わせのために十干が生まれました。干は幹のこと、またエネルギーについての内外の反応の原理を説明しています。支は枝のこと、生体を組織、構成、成長、退化し、またもとの細胞や核に戻ることを説いています。2015年の「未」は木に若い枝が出ることを意味していました。紀元前200年代の秦の時代には十二支と動物の関係が成立していたことが分かりました。十二支の各文字の原意は不明ですが、順序を示す記号だとか、草木の成長における各相を象徴したものとされてきました。人々が暦を覚えやすくするために、身近な動物を割り当てたという説

が有力です。

十二支中国発生説に対して、紀元前2000年頃から紀元前400年頃までバビロニアで行われた天文学の黄道十二宮が伝播してきて十二支と結びついたという説もあります。

十二支の動物と人間との親密さは、アニミズム信仰や人間の氏族霊(トーマス)を動物と考えたこと等から、人間と動物とが魂が交流しうると認め、両者の関係は深く長いものがあります。(拙著『水の伝承』新公論社、『十二支の民俗伝承』おうふう)。また、羊にかわって山羊が十二支にはいつているのは、ベトナム、タイです。

羊年うまれの性格は、動物の羊に準(なぞら)えて、温厚で、清潔好きで、美男・美女が多いとされています。芯はしっかりとして、家族思いで、内面はロマンチストで、フレンドリーな性格です。さて、私の生まれ年は……。

小金井雑学大学の設立は、平成10年3月で、真の豊かさを模索する試みで大学に集う人々が学ぶ機会としてはじまったと伺っています。月に2回の講義で、三百八十数回を数えることを知り、長坂学長先生はじめ理事の皆様、会員皆様のご尽力の賜物と感じています。ますますの盛会をお祈りしています。

講義でのお話と違い、今日は羊年と干支についてお話させて

# 雑学大学賛歌(いきいき人生の秘訣)

## リポーター 東海林のり子



長坂寛学長と東海林のり子さん

雑学とは呼べないまでも現役でいたいという強い思いと、日々健康でありたいという「気持ち」位はお伝え出来ると、参加させて頂きました。

自身の経験などを話しているうちに、学生の皆さんのどんな事でも吸収してしまおうという前向きなエネルギーを感じ、私の気持ちを押し上げて頂きました。

考えてみれば、「16周年」との事、この雰囲気は、雑学大学が続けてこられた年月の長さに参加して様々な人達の話を聞いてみたいという気持ちが作りあげたもの。それを支えるボランティアスタッフ、世話人の方々。

人はどんな人生を歩いてきたとしても、生き続ける限り、未

体験、未経験な事を興味深く求めていく、それが「人生をいきいきさせる」のだと思います。

私が今まで取材などで出会った方は、何人いたのだろうか？とふと考えた事があります。事件だけで二千件近く、一件二十人インタビューしたとして四万人、他に大事件、災害となると限りなく多い。

ロクを楽しみに東京ドームに行くと、五千人近い若者であふれています。そんな時、過去に出会った人達はともこの中に入りきれないと考えると、自分の仕事はこれ以上の人達との出会いで成り立っていたのだと感動するのです。

まだまだ仕事の幕引きをしないととなると、これから先「どんな出会いが待っているのだろうか？そして、どんな方向にむかつていくのだろうか？」と考える事が、私を前へ前へひっぱって行ってくれると思うのです。

大学からの友人長坂氏から、小金井雑学大学として講演依頼があった時は、雑学大学？学長？と一瞬考えましたが、学生時代の勤勉さと真面目さを思えば、年を重ねても青春時代の情熱を失わないパワーに驚き、「YES」と即答したのを思い出します。

### 17周年記念講演のお知らせ

## 「アヘン戦争と、 その余波を語る」

大井 功氏 (松蔭大学教授、文学博士)

3月15日(日) 2時~3時

会場は萌え木ホール (商工会館3階)

どうぞお楽しみに

小金井雑学大学は東京雑学大学と連携し、「まなびの雑学実行委員会」として年に1度フォーラムを実施しています。2014年度は6月8日に「多摩と玉川上水」と題して、学芸大学の大石学氏や東大和市の安島喜一氏の講演を開催し、大勢の方が来場され、好評でした。今年も予定しております。

# 「縁」と「和」

小金井囃子保存会会長 鈴木 源次



第 376 回講義 7 月 20 日

平成 26 年今年最後の活動である福祉協議会関連の出演終了後、路上で代表理事の五十嵐さんにお会いして、この原稿のお話を頂きました。普段、この道をこの時間に歩くことも珍しくこの偶然を「縁」と感じました。小金井囃子保存会と小金井雑学大学様との「縁」は毎年二月下旬に行います当保存会稽古始め総会の事でした。昨年は小金井囃子保存会 75 周年の記

念総会でしたので、多くの皆様  
に小金井ばやしの神楽囃子を知  
つて頂きたいと挙行致しました。  
その席に小金井市議会議員の五  
十嵐様が居られ、講義のお話が  
トントン拍子に進み 7 月に出演  
させて頂きました。

75 年の中で初めて、歴史、組  
曲、舞い等々囃子の内容を聞いて  
もらう機会を頂き且つ囃子連  
中が協力しあい、パソコンを使用  
した講演は、時代に沿った伝授  
方法を実行出来ました。この新  
しい分野に挑めたのは、私達の  
「和」が雑学大学様との「縁」と  
結びついたからだと思われま  
す。

顧みますと、私共の囃子は地  
元小金井神社で細々と「中山谷  
ばやし」としてはじまりました。

笛や太鼓の音色が村中に響き、  
秋祭りのはじまりを伝えました。  
戦地に赴いた諸先輩方も続々と  
復員され、戦前の様に囃子が出  
来る喜びで仲間達と楽しんでい  
ました。

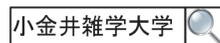
昭和 29 年に小金井神社宮司  
星野治亮を中心に当時の青年  
団と地元が協力し中山谷ばや  
し・山車復興協議会が発足し現  
存の二代目の山車が完成しまし  
た。この時の理念「地域に役立つ  
人材を育成する」は現在も標語  
として受け継いでおります。人  
材を育てる囃子になれというこ  
とです。私達のお囃子に名人は  
必要ありません。

小太鼓(調) 2 人・大太鼓(大  
胴)・笛(鶯)・鉦(四助)の五人囃子  
が、お互いの心をあわせ一つの音  
を作り出し組曲を奏でます。こ  
れが「和」の心です。

講演という場で多くの方々と  
出会いました事はお囃子の「和」  
が雑学大学様との「縁」で広がっ

たと大変幸せに思っております。  
この様な機会を作って戴き、誠  
にありがとうございます。

「雑学だより」のバックナンバーは小金井雑学大学 WEB サイトでお読みいただけます。



## 編集後記

昨年は特別企画として、映画鑑賞会「シバ 縄文犬のゆめ」を開演しました。映画鑑賞会は雑学大学として始めての試みでした。当大学をご存知ない方も多く参加されました。これからもこのような新しい試みに、時折取り組んでいきたいと考えています。

今年もより一層充実した講義をお届けできるよう、理事一同がんばります。

田中留美子 記

発行責任者 五十嵐京子